

# きびのたね

NO.109  
月刊

昭和四十二年七月一日発行 (非売品)  
岡山県都窪郡吉備町東町一五五号短方  
吉備舘 光協会

## ○高塚常吉 (その二)

専売特許一人織花菱機製造販売廣告

第五、此志人織特許機ハ通常ニ人織機ト異リ如何ナル緻密美觀ノ意匠ヲ製造スルモノモ  
概ノ作用ヲ以テ容易ニ出来シ通常ニ人織機ニテ為シ得ラル可カラサルヲ以テ他格ハ非  
常ニ騰貴シ且蘭草等モニ人織機ヨリハ短キ分ヲ使用スルトモ若シキヲ以テニ人織  
機ニ比シ効用徳益アル可シ

前項陳ルガ如ク此新奇有益ナル改良一人織特許機ニ比シ通常ニ人織機ノ弊害アル事  
家ハ筆紙ニ盡シ難ク依テ今所新ニ花菱製造營業開始ノ諸君ハ現今設立ノ会社ニ就キ  
両機ノ利害得失ヲ御覧御熟考ノ上此改良一人織特許機ノ便利有益ナル事ヲ御確信相  
成候諸君諸々御任人被成降度切切囑ニ御用兼リ可申上候也

明治廿七年五月

岡山県備中国賀陽郡庭瀬村大字庭瀬

發明人

高塚常吉

同県 同郡 同村 大字 同所

同

沢田鎮夫

## 各任様

發明家の高塚常吉は香川県出身で、田中善八の二男として安政元年三月四日に生れ  
十七八歳の時庭瀬に在り明治八年四月五日廿二歳の時庭瀬藩の林梁の藩である高塚典  
吉の娘ヤスと結婚して高塚家を相続した。大正十一年四月十六日六十九歳で大連市(朝  
鮮)に在る息子ヲモとを密死した。墓は本宮院墓地にある。

江田鎮夫は庭瀬藩士江田龍雄の長男に生れ、万延元年五月二日御母に生れ、昭和十四年  
十二月六日八十九歳の高齡でなく存した。その子秀夫は改御を去つて東京に在り。  
累代の墓所は本宮院にして位牌は同寺に安置してゐる。

## ○祿屋親光

親光は天正十年の高松城水攻の合戦に毛利方にあつて足守町の冠山城に籠城した勇士  
祿屋七郎兵衛村定勝とある人と同一人である。(廣田輯高松城の水攻の合戦参照)と  
の先祖は由緒ある武士の家柄に在り望屋郎三郎村(総社市)に在りてゐた。よつて此  
の系統を述べることにす。

祿屋氏は次の遠祖は上野国吾多郡の住人に在りて、清和源氏江田三郎満氏の後裔である  
満氏の嫡子を三郎民部少輔兵衛助親光といふ。その後の江田三郎親光氏が延元元年朝廷  
方の脇屋義助に従ひ、足利軍氏追討のため次の部将大江田氏経の旗下として備中国浅  
原福山城に立籠り足利直義の大軍と戦つて大敗れ逃れ、この地に在りて居たのである。  
光氏の室は大田遠江守氏利の女である。光氏の一子十郎五郎親信といひ、福山城  
合戦には十七歳にして出陣し、父子ともに負傷した。父親氏は延元二年七月廿九日死去  
した。光信は總社大明神ヲ祿屋大宮司信友に效わし、この地に蟄居し姓を祿屋に改め  
た。正平元年武家方の山名伊豆守時氏公軍を起したので信友の討つて薩兵二百余人  
を奪つてその令下に在り、備中国全境の酒津山に城寨を築いて近隣を制した(正平三  
年朝廷方の忠臣楠 正行が四條殿に討死した)。

その子万千代、後ちに七郎左エ門尉利光という。この時稱屋姓を名乗り應安七年には  
(南、文中三年)九州の菊池武時の戦に出陣して武勇をあらわした。足利義満よりの令  
旨をうけて備前国矢坂の甲山城(所在不明)に城築してここに據つた。永和四年五月  
(南、天授四年)には山名陸奥守氏清の軍に参加して京都にのぼり翌康暦元年正月(南  
天授五年)廿二日橋本民部少輔正冬と戦つて討死した。利光の弟利義は江田次郎兵衛  
尉と稱し、都守郡日差山の北麓に領地を有しここに住した。江田村という所はその遺  
跡と伝へている。

利光の子は弥屋権七郎光行といひ、後ち安房守となつた。母は児御郡の住人三宅駿河  
守重貞の女である。明徳元年四月(南、文中七年)に山名氏清が降起したので管領細川隆  
興が入道常久の催促によつて京都に至り戦功あり應永十八年に落馬して死去した。  
その子権次郎康光、後ち兵部丞といひ、母は備前国邑久郎福岡の住人黒田佐渡守  
高照の女である。(黒田氏の子孫は永祿の頃に姫路城主小寺氏の家臣となり、後ち豊  
臣秀吉に仕え高松城の水攻に活躍した黒田官兵衛孝高である。徳川時代には九州福岡  
城主五十二万石に封ぜられた黒田長政は父に孝高の子である)福岡の地名は故郷の  
福岡に因んでつけられたのである。

嘉吉元年赤松満祐が謀殺を企て將軍足利義教を弑して本國播磨の城山城  
に逃れたが細川、武田、山名の大軍に攻撃され白殺した。次の一族の赤松後守持  
貞は同國佐用郡上月城に立籠りて反旗をひるがへした。よつて康光は管領細川勝  
元の命をうけて上月城攻めに出兵した。城主持貞は自害して城は落ちた。康光は賀  
陽殿服部城(総社市)を築いてここに住した。父年七十余で文明十年八月十三日  
病に犯され歿した。その子に久老、久利の二子があつた。永祿十年佐山城主(高梁

市)三村元親は同年の敵、備前守喜多直家を滅さんと大軍を備前に進撃せしめ  
た時、この服部城は後の久利が在番し、兄の興七郎久老は三村勢に加担して出陣し  
一線にある明禪寺城を死守したが、守喜多勢の急襲にあつて散々に打破られ大將久  
老を初めその家来の岡、前田、梶屋、穂山、岡崎等の勇者は悉く戦場に死をさら  
した。(漢四韓合戦篇 明禪寺合戦の項参照)

久利は五郎左エ門といひ、母は薬師寺藤沼郎左エ門尉公義の末葉である。十八歳にし  
て父康光と共に中国の大守大内政弘の旗下に属し文明年中に京都の暗闘に上京し  
戦功をたてた。服部城の城内乾の丸の正八幡宮並に総社大明神は文明十二年遠  
講した。八幡宮は源氏の祭神武運を祈る神である。

元龜三年の春日利將軍家去健にフソて争ひが起つた時、固防の大内義興が入洛の際に  
從軍して忠勤する所があつた。永正九年の末に出雲の尾子義久が兵を作州に進め使者  
をして助勢を乞うた。久利はこれに應じて作州に赴き佛教寺にて赤松左京亮則春の軍  
勢を破り、久利は自ら則春の子考太郎則忠を生捕りにして大將尾子彈正少輔晴政に  
渡レ慇懃を賜つた。大永二年正月十八日病死した。その子秀光、母は石川源左エ門久  
友の女である。父久利と共に作州佛教寺に出陣した。この時備前守神田といふ所にて  
深手を負う。其右尾子氏衰へて去つて芸州毛利大膳大夫元就の幕下となり猿掛城主三  
村尾張守景親の軍に従ひ、石川左エ門久智、中島大次助元行、弥屋七郎兵衛秀光等備  
前の龍ノ口城に立籠り岡、豊前守判晴、明石能澤守、攝所治部少輔等を攻めて兼取り  
弥屋七郎久老、薬師寺孫五郎長茂等居城した。

父元は源光の三代後ちの秀光の子にレシ、幼名は兵七郎とシテ、母は中島加賀守輝行の女也。父元は毛利氏に從ひ、永禄四年に尾島郡常山城主延原女藏丞貞勝、宇喜多興六郎其家等備前等と戦ひ、常山城を降し、清水長左エ門尉宗治、中島大炊助元行、弥屋興七郎父光等在城した。また父元は龍ノ口城を守り、永禄十年七月十九日、宇喜多浦上等の連合軍と數度合戦を交へ、終に城中に自害した。年は廿七才であつた。

親光は七郎兵衛尉、幼名は鶴丸とシテ、母は伊達経伊守重友の女也。伊達氏は文和初の野山城主也。父元光、祖父秀光は備前宇喜多氏との戦に討死し、親光十一歳にレシ、家督を継ぐ。祖父秀光の時代に服部郷の女阿曾の庄の住人、島崎三郎右エ門尉、林三郎右エ門、西三須の因国府三郎兵衛尉等は毛利氏に叛くことあり、領地を悉く没收せり。此たが、其右島越、林は旧に復したた、因府のみは赦免にならざり、いに帰業したとシテ、

鶴丸は幼少のたため一族の江田三郎左衛門尉初忠、家僕の老畑掃部介房清、難波経殿介兼貞、林興左エ門景久によつて龍ノ口城を守り、長じて親光に改めた。天正二年三村修理亮元親が主君毛利氏に叛いたり、杉山城を攻落の時に難功をたてた。(第四階合戦、益松山城の合戦参照) 天正六年の夏、播磨国佐用郡上月城に立籠り、尾子勝久を攻撃した時、は小早川隆景の陣に加はり、織田信忠、羽柴秀吉の援軍と対峙して勝利を得、城を屠り、驍将山中藤之助幸盛を押寄せ、城を降した。小早川隆景は其州に帰陣の途中、服部城に立寄り、上方(織田氏)の守備として、新山城には島越三郎右エ門、岩崎山には弥屋七郎右エ門親光を配備させた。

五  
六

天正十年高松城の攻め合戦には、新山城に立籠り、林三郎左エ門尉、藥師寺弥五郎が参加した。東軍は村の北東湯坂の山手から城を包圍した。この城は三方は深谷にて、北東方には大堀あり、一つの橋を架け、城の南に宿面山とシテ、ここに羽澤方は砦を築き、その巨堀尾忠助、荒木平太夫を揃へ置き、近原左守を守城とした。銀谷屋山には宇喜多秀家の被官、岡越前守の一隊を配置した。宇喜多勢の四分の一の軍勢もある。守手にまかせ、味方は討たれ、退却す、日数を重ねれば、其軍の後詰も難儀に及ぶ、と、かく謀議の最中に四月五日戌の刻に、城兵の松田左衛門の守もの、諺つて塩硝(火薬)に火が移り、城中大騒ぎとなり、反志のものも起り、敵が一度に城内に攻め込んできた。七郎兵衛は漸く戦場を切り抜け、数ヶ所負傷して、服部の守城に引き退き、吉川勢と一所になつた。その合戦の感状に

今度、新山不覚之落去、不及是非、以各々無二之覚悟也。此如、下江口惜次第、以御方之儀、無恙被取、速可急、以被致、底重頼、ニ申、此彼是取、礼無音、親作、中之諫志、此節分際、罷走、以祝、美は猶、此者、申、以九々

謹言 (天正十年) 五月九日 (小早川) 隆景 在判

弥屋七郎兵衛殿

親元は岡山落去の時、負傷し、其上備中川東(高梁川)を切り、秀吉へ御渡し、天下和平する。依つて服部城に居り、里田官兵衛孝高へ相渡された。則ち服部領は宇喜多八郎(秀家)へ相渡り、宇喜多氏から家臣戸川越右衛門入道繼林(戸川秀安にレシ、庭瀬城主戸川肥后守達安の父也)常山城主也。ある(へ)預けに付、親元より戸川氏へ内談あり、服部の内定本とシテ、所へ下屋敷をあたつたので、この所に住居し、我衣を兼て、閑居し、文禄元年正月

刺髪して鬚を龍母と改め元和三丁巳年正月十一日六十歳で他界した。  
 服部家は秀家から遊林へ預け守りせ城母の三ノ丸八幡宮を西の平地へ勧請し城の要害  
 と取調べ老臣長船、岡 淳田 花房ら秀家へ報告しついで文正の末に破却した。  
 安義は親弟の嫡男である。母は清水長左エ門宗治の妹である。文禄四年に召出され  
 小早川隆景に従ひ朝鮮征伐に出陣した。毛利輝元の旗下雲州萬ヶ峯の城を冷泉玄部  
 大輔元光が蔚山を準備してつる所へ朝鮮の漢南營が数万の兵をもつて攻め寄せ城を  
 包圍した。毛利軍は後詰して毛利に奮戦した。この時安義は戦死した。文禄四年正月  
 三日のことである。(以下省略した。古文書と相違する点もあるが、まは論ぜず)

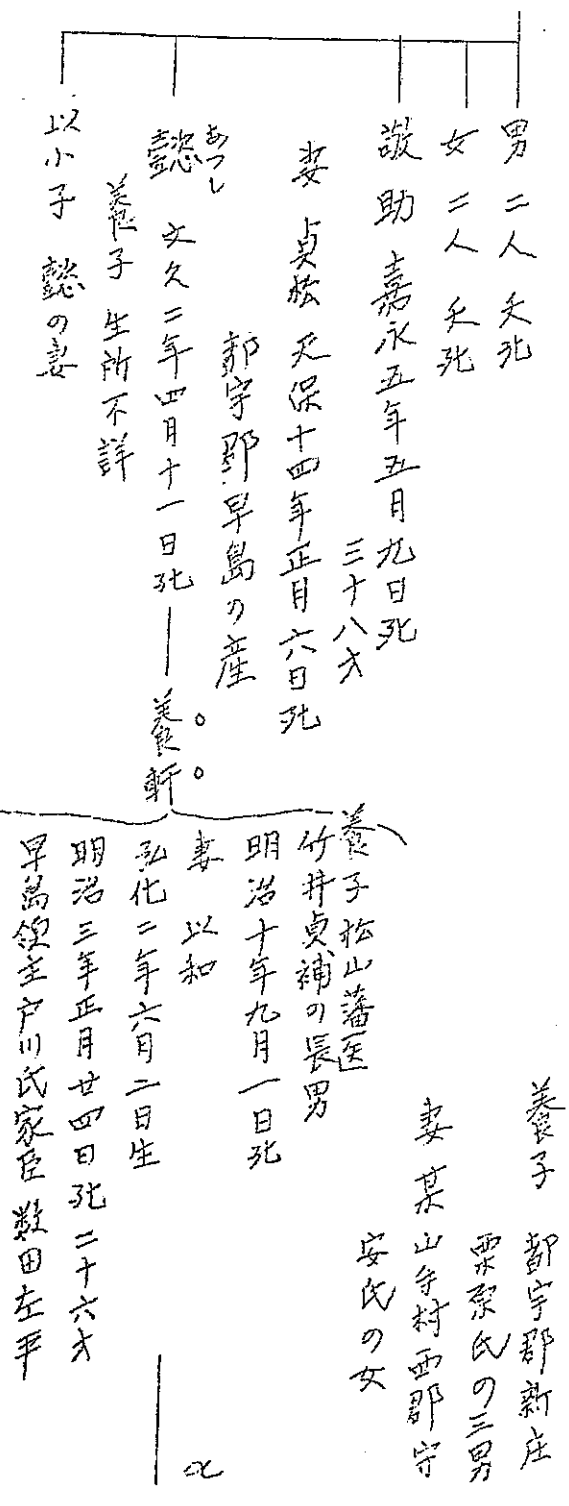
岡本時慶

時慶は庭瀬牧倉氏の藩医にレレ諱は豊、字は子明という。俗稱は隆郷といひ長じて時  
 慶に改めた。父の先祖は都守郡新庄(高松町)の人で、父の姓は栗原氏、母は川上氏  
 である。時慶は父の三男として生れ岡本家に養子した人である。幼より医学によつ  
 て身をたてんとし山手村西郡の医師守長郷にツいて学び、後ち数年間沼州の医  
 師鬼草岡子のもとに専念して益々修得した。帰郷後は医業を閑いて多くの患者  
 に接した。父宅の一部に痲室を設けて診察した公をの名を聞して來訪するものが多  
 く控くなりツに居室にまで乞うものが元日に門前を塞ぐ有様であつたという。  
 妻は守安長郷の娘某にレレその間に三男四女をもうけたが、いづれも夭死し未嗣の故助  
 は文政十一年に庭瀬藩に仕へて騎士班となり七人扶持を賜わり季女の以小子に懿を養  
 嗣に迎へて跡目相続にレレた。  
 時慶は藩主の信望が厚く屢郵宅を訪るなど寵愛をうけてつたので時慶はつた

く感恩した。当時藩の財政は漸く困窮のきざしがあつたので補助として若干の献  
 金をした。天保十二年には授權されて医員長となり十五人扶持を結興された。時慶  
 は常に質素儉約を旨とし、故食は薄く専ら刀圭の研究を怠ることはなく、最も外  
 科に精進してつた。假りに病人にレレて薬価にとほレいものには深く貪らなレいので多く  
 の人は皆その篤実なことを稱揚した。安政三年六月十八日痲に患され五十六歳で永  
 眠した。屍は先堂の地大塚山へ埋葬した。

岡本氏系

岡本高孫天明五年九月廿七日死——某文化五年九月一日死——時慶日北 五十六才



大正美の長女

標作 明治二年九月九日生 六十九才 慶太 (多志)

昭和十二年九月十二日死

岡山市下田町に移住す

妻 近子 大正十三年三月八日死

岡本家累代の墳墓は大塚山にある。

岡本亮弥 天明五年己未九月廿七日

註 ちゆんせきの殿とあるは棺蓋に記せる。即ち墓の二ことある。

最勝院相旭玄應居士 文化五年辰九月朔日死 七十二歳 岡本氏

功德院體法智護 信士

(碑文あるを埋滅し判読しがたし)

一 岡本貞松 碑 天保十四年癸卯正月六日

行年二十歳而卒 此早島産終是瑞命哉 (段助の妻)

一 觀念自到 信士 嘉永五士子歲五月九日 行年三拾八歳 牛島村岡本段助

一 杏林院裏露曜慶居士

瑞雲院觀老智沢大姉

姓岡本 諱豊 字子明 俗稱隆衛 後稱時慶 其先即守郎新左人考

素性貞母川上氏 大人其後三子少学医於守安長卿子精勵不倦 越

數年遊紀州累幸函子 業文成 築室早津以居乞治者日填門 文政戊子

末嗣岡本氏 為騎士班賜七人之詔 恪勤 以居屢恩賜 大人慈淑餘金

於 公天保十二年權医員長益賜十五人之詔 大人務為淑約 薄收家

業刀匠長 尤遂于外紆訪有疾人無費者無負德莫不感 親人皆稱篤

矣 安政三年丙辰六月十八日病卒 享年五十九有六 葬大塚 西即守

安氏女 有三男四女女独孝女有以小子 懿配其女為嗣 七人病篤曰吉

懿感愴不能 自己謹叙大人行義之變原 以銘之

勅々大人 刀圭斯宗 疾人填門 自西自東 薄衣菲食 康濟率躬

不壞其家 袒跣乃隆 三十餘年 以事孝忠 博乎其行 泥而不暇

冲子紫々 如何不聞 茲作銘詩 永徵厥功 嗣子 岡本 懿 謹撰

一 敬院殿阿曾嚴居士 文久二年癸卯四月十一日 岡本善茶誌 (懿の妻)

一 真光院院阿妙善大姉 明治三年庚午年正月廿四日 岡本善軒妻墓 二十六年 行年

一 淨光院森山巖道慰居士 明治十年丁丑九月朔日 坂杉山藩守井貞輔長男岡本善軒四十七才

一 岡本近子之墓 大正十三年三月八日 昇天 野乃百合は如何にレて育かと思へ

一 岡本標作七人命之墓 昭和十二年九月十二日 卒去 (六十九才) (おわり)

セルマーズの店 撫川大橋詰

河内百貨店

吉備局 電七番・右線九一〇八番

寝具類 一式

中山ふり店

吉備局 電四番 右線七二〇番

吉備町本町